

国木田独歩の小説

「源おぢ」について

山内武麒

(賛助会員・佐伯市城下東町)

国木田独歩の処女作であり、その名作の一つに数えられている小説「源おぢ」について、これを作ったときの経緯や、その間のエピソードについて記してみよう。

独歩は、明治三十年の四月二十一日に、親友の田山花袋と連れ立って、東京から日光山の照尊院というお寺へ行き、六月二日までの四十日あまり、二人で半僧生活をしながら読書したり原稿を書いたり、またあちこちを散策したりして暮した。この間に独歩はこの小説「源おぢ」を書いたのである。

『欺かざるの記』のしまいの方を見ると、明治三十年の四月は二十二日と二十三日との二日間、五月は十三日と十八日との二日間、すなわち日光旅行の四日間の日記だけ書いて、この『欺かざるの記』の筆を絶っている。

この四日間の記を書いて、その解説を試みよう。

明治三十年

月二十二日 夜

九時書

一日光山照尊院

に在り。

今月十二日は

悲しき日の当日

なり。其の日九段公園に至りぬ。昨年は桜花散りそめしに、今年は咲きそめ居たり。

今月三日の夜、出立。田山君と共に布佐なる松岡君を訪ふ。滞在四日。四日の間の事、忘るべからず。

八日午後、独り銚子に下り父母を省す。十二日帰京す。十五日父上上京せらる。昨日朝東京出立。田山君と此の寺に來りぬ。一昨夜番町の菊地君を訪ふ。進歩党の党報外報掛の事につき相談ありき。

今日雨を冒して含満が淵を訪ふ。



明治四十年頃の葛港

この記は日光の照尊院に來た翌晩に書いたもので、四月中のこれまでのことをあれこれと誌してある。

「今月十二日は悲しき日の当日なり」とあるが、一体どんな悲しいことがあったのだろうか。昨年とあるので二十九年四月十二日の日記を見たが、十二日の記はなく十四日の記に次のように誌されてある。

十四日

一昨日信子の失踪以來、吾が苦悶痛心殆んど絶頂に達せり。信子失踪行衛未だ知れず。為めに我が苦痛我が筆の尽し得る所に非ず。余が肉体の健康の保有が不思議なる位なり。一昨夜、昨夜共に僅少の時間を眠り得しのみ。今は詳細の事実を記する能はず。

と記して、そのしまいに

悲しき事実

といふ題の下に、一昨、日曜日の事より今日までに至る三日間の事実の悲しき記録を詳細に留め置かんとぞ思ふ。

一昨、十二日は安息日なりき。余返子より帰りに已に此の日まで十数日となれども、会堂に赴きたるは此の安息日が始めてなり、午前八時頃信子を促して、収二もろとも三人にて

家を出でたり。あへて促してと言ふ。蓋し信子は自から進んで教会堂に出づるの様子なかりしなり。

朝食の時、食卓の彼方に座する信子に對つて余の曰く、「信子今日教会に赴くや」と。信子少しく笑みを含んで曰く「赴きても可なり。」

余直ちに曰く「可なり所か、應に赴かざる可からず。」と。斯くて信子は衣装を更むる為めやゝひまどりぬ。綿入一枚を着し、羽織は余これをすすめたれど着ざりき。片手にふるしき包を抱き、片手に蠶蝠傘を持ちたり。包みの中には余と信子との聖書一冊づゝ及讚美歌一冊なり。其の外に何もあらず。

三人は先づ招魂社の桜を見物したり。それよりして教会に出でたり。落花の光景、此の時彼の女の心に如何に映じけむ。余にはたゞ美はしくのみ見えたり。彼の女の多感にして、是等の感情少しも後の書状に見えざるぞ不思議なる。彼の女は吾等の後へにのみ従ひて來り、今よりして想へば、言葉數極めて少なかりき。

会堂にては彼の女は女席の最も後ろのベンチに倚り、余は男席の前の方なる所の座を占めぬ。故に彼の女が如何なる形容を植村君の説教中にもらしたるかを少しも知る由なかりき。

そしてまたその翌日の十五日の日記には、悲しき事実(つゞき)として次のように記してある。

植村師の説教はクリストの人物考なりき。

クリストが人寰かんを脱して神に祈り、神と交はりし事、大罪人を喜んで容れし事、等なり。

説教了はり、会衆散ぜんとして、余もまた出口に立ち出でたり、信子の来るを待ちぬ。信子出で来らず、余は婦人席の入口に首さし出して信子を呼びぬ。信子出で来りつ、余に聖書の包を渡して曰く、

「只今明治女学校の生徒に会ひぬ。これより直ちに同道して寄宿舎に至り星良子嬢に会ひ彼の女を吾が家に連れ帰らばやと思ふ」と。

余何心なく曰へり。「最早昼食なり。早く帰り給へ」と。信子曰く「直ちに帰らむ」と。余此に於て外に出で信子復内に入り。余は全く無心なりしが、此の時の信子の心中果して如何なりけむ。熱湯を吞むほどの苦痛ありしならむ。

余収二と共に家に帰り、昼飯を了りて再び教会に到りぬ、これ青年会に出席したるなり。

青年会散じて帰路富永氏の宅に同道し、午後四時過ぎ家に帰りぬ。

信子あらず。余は一種異様の感ありたり。何故にかくは遅きぞと、此の時己に夕食の用意出来居たれども余餘りに氣にかゝれば、父母に言はずして直ちに外出し、明治女学校の寄宿舎さしていそぎたり。寄宿舎は中番町二十二番地に在り。路に星良子嬢に会ひぬ。余驚きて向ふて曰く「信子今日御

身に訪ひし苦なるが如何」と。良子嬢顔色を變じて曰く、「不思議なる哉、今日先刻来訪ありしも直ちに帰り給ひぬ、顔色甚だ悪かりき」と。此の答を聞きし余の驚愕如何ぞ。余の声ふるひ、余の心波の如くに激しぬ。「こは不思議なり。まだ帰宅せず」と言ひ捨て、直ちに良子嬢と分れ、家に帰りたり。信子依然在らず。(以下略)

このようにして昨年こぞの四月十二日に最愛の妻信子は、独歩の許から失踪してしまつたのである。一しょに行つた教会堂(植村正久牧師の主宰する麴町区の一番町教会)で別れて、信子は姿を消してしまつたのである。独歩は悲痛悲嘆のどん底に陥つてしまひ、半狂乱になつて信子を探し、漸く探し出して帰えるように幾度も幾度も求めたが、信子は頑として応ぜず、その結果とうとう離婚してしまつたのである。

この日記を書いた頃にはこの失恋の傷がまだ十分癒えてなかつたのであろう。悲痛の訪れた昨年こぞのこの日を追想しようと、あの日教会へ行く途中に立寄つた九段の丘の靖国神社の桜を見に行つてゐる。昨年は花が散り初めていたのに、今年こぞはようやく咲きそめていたと述懐して

ある。

独歩と信子との関係は、独歩が明治二十七年八月一日に佐伯を離れ、一旦郷里の柳井に帰り九月に東京に出て、国民新聞の記者となると、間もなく海軍従軍記者となつて軍艦千代田に乗込んだ。そして報道に当り有名な「愛弟通信」は読者に大いに受けた。二十八年三月に艦から降り、六月の初めに佐々城豊寿夫妻に従軍記者連が招待を受け、独歩もその席に招かれた。その席でこの佐々城家の長女である信子と初めて知つたのである。佐々城豊寿と言う人は、医師の佐々城本支氏という人の妻で、当時矯風会の幹部をしていて、自由民権を唱えていた女傑の一人であつた。

独歩と信子とはこの従軍記者招待の時がきっかけとなつて交際が始まり、その交際は急に進展して遂に熱烈な恋愛に陥つた。そして結婚することを誓ひ合つた。しかしこれには信子の母豊寿の激しい反対があつたが、それを押し切つて十一月に結婚し、逗子で愛の巢を営んだが、二十九年四月に東京に帰ると間もなくこの悲劇が起り、とうとう破綻してしまつたのである。

星良子嬢は信子とは従姉妹の間柄で、この人は後に相

馬愛蔵氏に嫁いで、あの東京で有名な菓子屋中村屋を開いた。この人は筆名を黒光と称し色々な著作がある。この人の書いた「黙移」には、この独歩と信子との恋のいきさつを筆細かに記してある。

日記に帰ると、四月三日の夜出發して、田山花袋と連れ立って利根川河畔の町布佐に松岡氏を訪ねている。四日間滞在し、この四日間のこととは忘れてはならないと書いてある。よほど歓待されたのであろう。松岡氏とはかの有名な民俗学者柳田国男氏のこと、独歩や花袋とは深い交友があつた。この柳田氏の長兄が医師でこの布佐で開業していたのである。

八日には銚子に住んでいた両親を訪ねて、十二日に帰京している。十五日に父上が上京して独歩の許に来てくれる。多分留守番に来たのであろう。昨日(二十一日)の朝東京を立て親友の田花花袋とこの日光山の照尊院に來た。花袋は前にもう二三回來たことがあつたが、独歩は初めてであつた。こゝに来る前の晩、番町の菊地氏を訪問したとき、進歩党の党報外報掛のことで相談を受け

た。就職についての相談であろう。

今日は雨の中を含満が淵まで散歩した。散歩好きの独歩のことだから、一時もじっとしていられず、雨もいとわずに早速出掛けたのである。

二十三日 夜の九時

我身を詩人の一人と思ひ定めつ、或物書き成さんとして此の地に来りぬ。或物とは何ぞや。あゝ或物とは何ぞや。

過ぎし幾歳の事件、眼閉づれば幻と浮びて鮮やかに現はれ来る。山や河や、言ふまでもなし。彼の人の事、此の人の事、三年昔の一夜の事、二年前の朝の事、あゝ何物か詩料ならざる。これを描きて詩と成し上げん術もがな。

経歴以外の事を誰か書き得ん。現ならざりし事を誰か夢み得ん。

独歩は自分は一人の詩人であると自認して、必ず何か創作してみせるとこの日光に來たのである。或ものは何か、きつと書くとき意気込んでいる。

この独歩と花袋との二人の日光生活の様子を、飾るところなくありのまゝに描写した花袋の「KとT」という

回想的な文学作品がある。Kとは勿論国木田独歩であり、Tとは田山花袋である。その中に、

Kは「是非やる、此処に來た記念に、処女作を是非書く。今日も一日考へた。君から見ると、怠けて散歩ばかりしてゐるやうに見えるかも知れないけれど……。かうやって考へてゐるといふことも、仕事をしてゐるのと同じ労作なんだからなあ。」とある。

さて何を書くか、過ぎし幾とせのことをじつと眼をつぶつて回想すると、懐い出が幻のように次から次へとはつきりと浮んでくる。思い浮べた山や河には、独歩がこよなく愛した元越山や番匠川など佐伯の山河があつたに違いない。あの人のことこの人のことと浮んできた人々の中には、佐伯の人が幾人もあつただろう。三年昔の一夜の事とあるが、三年前は佐伯に居た時のことである。その一夜とは何時であろう。二十七年の七月二十三日の『欺かざるの記』を見ると、

「昨夜涼風に乗じて宿処の主人等と語る。夜更けて雨をきゝつゝ一文を草しぬ」

とある。多分このことを指しているのだろう。

小説「源おち」の初めの方に、

「二階なる一室を下りて主人夫婦が足投げだして涼み居し縁先に来りぬ。夫婦は燈つげんともせず薄暗き中に団扇もて蚊やりつゝ語れり、教師を見て、珍らしやと坐を譲りつ。夕闇の風、軽ろく雨を吹けば一滴二滴、面を拂ふ三人は心地よげに受けて四面山の話に入りぬ。」

とある。前の日記と同じ情景である。即ちこの晩葛港の下宿した鎌田旅館の主人清作氏から、源おぢ本名高原嘉治郎の哀れな身の上話を聞いたのである。

「KとT」の中に、

「Kの卓の上には、詩集や小説に雑っていつも必ずその日記の一冊二冊が載つてゐて、やがて着手すべき処女作の材料を其処から探し出すやうにして、かれはそれを繰返しながらか昔を思つた。」とあるが、日記とは『欺かざるの記』であろう。独歩はこれを繰返し読んで、昔を追想しながら書こうとする詩料を探したに違いない。

またこの記にあるように、経歴した以外のことを誰が書くことが出来よう。現実になかったことを誰か夢見ることが出来よう。独歩は過去に見たり聞いたりしたものから創作の材料を見付けようとしたのである。

五月十三日

日光に於ける自分の生活、昨日は今日と同じく、明日もまた昨日と同じかるべし。朝は大概六、七時の間或は七、八時の間に起き、夜は十、十一時の間或は十一、十二時の間に床に就く。食ふものまた毎日同じ。朝と昼は味噌汁、夜は豆腐、日々然り。晩食に一合餘の酒を二人にて飲む。

今日「源叔父」の清書を了はりぬ。半紙三十枚なり。

麻郷村、麻里布村を舞台とせる作に着手して已に二回十五六枚を書き三回を書きつゝあり。中禅寺湖より戦場が原あたりまで一遊したり。

庭には桜、黄梅、ぼけ、しゃくなげ（日光特有の花）、桃、つゝじ、木蘭、一時に咲き出で、已に散りしもあり、水際にはかはほね咲き、草花にはすみれ、つりがね草、たんぽぽ咲きみだれぬ。

新体詩十余篇を作りぬ。

この日の記には、はじめにこの日光に於ける生活の様子を誌してある。毎日同じような日を送っているとある。食べもののことを記してあるが、まことに簡素な生活ぶりである。このことは花袋の「KとT」にも誌されてあるが、独歩が亡くなった後、花袋が独歩を偲んで書いた「日光時代」（明治四十一年八月発行の雑誌『趣味』に

所載」と云う作品に詳しく記してある。それには、

「飯は七十位の老婆が居て、其に焚いて貰ひ、汁も拵えて貰ったが、朝二度分取って置いて、昼も其汁で済す。晩は豆腐を買って、半分は飯の菜に、半分は酒の肴にして、二人で一本飲む」

とあるが、いかに簡素な生活であったかが解る。

この日、小説「源おち」の原稿の清書を終っている。

半紙三十枚であったとある。これが待望の処女作である。

花袋の「KとT」の中に、

「Kは何うやら彼うやら三十枚ほどの処女作を一つ書き上げた。そしてそれを一昨夜Tに読んで聞かせた。Tはある処は感心したが、ある処は感心しなかった。それを傑作のやうに自認して得意らしい顔であるKがTにはわからなかった。」

とある。

独歩がこの「源おち」を書きあげて、如何に得意であったかがうかがえる。独歩は花袋に「貴様の原稿料が三十銭なら、俺は四十銭貰はなければいやだ」と言っている。傑作だと自認し、自信たっぷりだったのだろう。

独歩はまた自分の故郷のように慕っていた山口県の麻

郷村、麻里布村を舞台とした小説を書きつゝあると記してある。これはどの作品であるかよく解らないが、「帰去来」の前作として書いた未完成作品であろうという人もある。

お寺の庭に次々と咲く春の花々、水際に咲く花、野辺の花など書きならべ、春のおせい日光の風情を写してある。

またこの日光に来て、新体詩を十余篇作っている。

十八日

十四日より十五日にかけて湯本に遊びぬ。

本日「源叔父」を太田氏まで送りぬ。

菊地氏より来状ありたり。

昨日父上より来状ありたり。

この日記が『欺かざるの記』の最終の記である。

「十四日より十五日にかけて湯本に遊びぬ。」

とある。この一泊旅行のことは花袋の「日光時代」の中にくわしく記してある。それによると独歩と花袋の二人は十四日に華嚴の滝を探勝しようとして、お寺の老僧から瓢箪を借りて酒を詰め弁当を持って出掛けた。二人は滝の

上流の浅瀬を渡って大きな岩の平たくなっている上に座って、持って来た弁当を開き瓢箪の酒を酌みかわした。よい気分になると、お互に懐から自作の抒情詩の原稿を取り出して、とうとうと落ちる滝に向って声高らかに朗吟し合った。興にのり、再びこんな絶景に出会うことはあるまいと、その原稿をみんな瀧つばに投げ込んで詩神に捧げた。

それから二人は湯本へ行って泊った。五月というのにこゝらの季節はまだ春の初めで、戦場ヶ原は見渡す限りまだ冬景色であった。

翌日（十五日）には鏡のような中禅寺湖の見えるあたりまで歩いている。

この日（十八日）に「源おち」の原稿を太田氏の許に送っている。花袋の「KとT」の中に「Kは昨日をそれ（源叔父の原稿）をH書店のO氏に送った」とあるが、このO氏である。すなわち花袋の義兄にあたる太田玉茗氏に送ったのである。太田氏は当時書店博文館に務めていた。なお独歩はこれを送る前日、太田氏へ次のような手紙を出して原稿の斡旋方を頼んである。

「其後は無沙汰のみ致し御健全の御事に奉存候、小生共画

人不相変無事執筆まかり在り候間御安心被下度候 東京は最早初夏の候と存候 日光目下新緑の好時節に御座候但し中禅寺辺は未だ新緑と申す処に至らず湯本は岩間に氷雪あり一口に日光と申せど季候は大変な相違に御座候 其後御製作如何に候也 小生一編の短小説を脱稿致候間一兩日中に貴君の御手元まで送附致すべく候間文芸倶楽部の方か又新小説の方へ御周旋被下度候尤も三十枚許りの短い者に御座候原稿料の処は少くとも二十五銭以上に相願ひ度く月末の支拂を当に致候事ゆゑ何卒御推察にて急々宜しき様御取はからひの程願上候且又処女作の事ゆえなるべく急に掲載を願ひ度若し其事かなわらずば甚だ迷惑に候間其辺十分御推察の上万事君の宜しき様に御尽力被下度候右成否の辺も御回報の程願上候 小生此頃頻に新詩をうなり居候日光山中已に二十篇に近き程を落成致候文学界へも少々寄稿の積に御座候 昨夜月明林影满地好景言語に絶し候 御近状御一報願度く田山と噂のみ致居候

十七日

哲

以上

太田玉茗盟兄

御家内様皆々様に宜しく御伝言被下度候」

こうしてこの太田氏へ送られた小説「源叔父」は独歩の処女作として、明治三十年八月一日発行の雑誌『文芸

倶楽部』の誌上に載って、はじめて世の中に発表されたのである。

菊地氏より来状ありたり とあるが、四月二十二日の記にある日光に来る前晩、独歩が菊地氏を訪問した際の件についてであろう。

父からも手紙が来ている、帰京を促した手紙ではあるまいか。

さてこの小説「源叔父」の原稿は、一体いくらで売れたのだろうか。原稿料については花袋に向って「貴様の原稿料が三十銭なら、俺は四十銭貰わなければいやだ。」と強がりを書いていた独歩であるが、花袋の「KとT」の中に次のように記されている。

「Kの処女作は、それでも一枚二十五銭で何うやら彼うやら売れた。作が短かく、雑誌に載せるのに丁度手頃であったからであろう。それにG社（これは『我楽多文庫』を発行している尾崎紅葉らの硯友社を指す）の連中の型にはまった作の中には、かういふのも変つてゐて面白いと、主筆は思ったのであらう。「矢張り、二十五銭だ。けしからんな、言つてやらなくちゃならない」かう

言ふものの、多少売れるか何うか懸念してゐたKの顔には、喜悅の色がそれとなく漲つてゐた。」

附言するが、この当時の一流の文士たちの原稿料はどれ位であつたのだろうか。「KとT」の中に独歩の言葉として

「一体、今の大家はけしからん。紅葉だつて、露件だつて、一枚一円三十銭から二円取るつて言ふぢやないか、Rなんかあんな下らねえ、牛の涎のやうな通俗小説を吉原の女郎屋の二階で書いてゐるつて言ふぢやないか。さういふ奴に一円五十銭も出して、我々には一枚三十銭とは人を馬鹿にしてゐる。僕にH書店は二十五銭きり支払はない。今度は四十銭以上でなければ買はうたつて売つてやらない。」と云つてゐる。同じ文士でも大きな差があつたものだ。

こうして発表されたこの小説「源叔父」の評判はどうであつたらう。この当時、文学作品を批判して最も権威あるものとして、森鷗外が主宰していた『めざまし草』という雑誌があつた。明治三十年九月に発行されたこの『めざまし草』の合評欄の「雲中語」に「源叔父」の評

として

「最負。事凡常ならざるに非ずして時に詩趣を見、文生生硬ならざるに非ずして、間々警句あり、是れ晩今処女作中罕に見る所にして、予が国木田氏を取ることある所以なり。彼天外鏡花の諸作の如きは、事或は奇、文或は熟すと雖、大抵この詩趣あること莫し。この警句あること莫し。(題叔父は妥ならず、仮名の方好し)」とあって、中々高評であった。処女作としては稀にみる傑作であると評された。

この「源叔父」は、その後明治三十四年三月民友社から発行された独歩の作品集『武蔵野』に載った。この時に「めざまし草」の評の注意に従って、「源叔父」の叔父を仮名書に改め「源おち」とした。

独歩と花袋との日光生活は六月二日まで続いた。花袋の「日光時代」のしまいに、

「此の日光時代に独歩君の処女作「源叔父」が出来た。此は『文芸倶楽部』に売った。其から「国民の友」には、ドーデーの翻訳を載せ、自分は「春の日光山」を書いた。二人の取った原稿料合せて三十五円、処で日光に二月居

た費用は僅かに十八円。「此ではお互に出稼に往ったやうなものだね。残ったちゃんいか」と云って二人で大笑ひをした。

都に帰ったのは、六月、日光の祭りを見て帰った。」とあり、そのあとに「半僧生活費」と銘うって、この二ヶ月間の生活費の一切を一銭一厘まで事細かに書いてある。この簡素な生活は二人にとって、まことに愉快なものでありまた有意義であったと思う。

独歩が明治四十年九月発行の雑誌『文章世界』に発表した「予が作品と事実」の中に「源叔父」(『武蔵野』に在り)と題して

源叔父其人も「紀州」と称する少年も実在の人物である。余が豊後の佐伯町に居た時非常に接近せるのみならず言葉も交はし其の身の上に就き深く同情を持ちしことある人物である。而して此一編中に記述したる此兩人それぞれの身の上の事も事実である。けれども此兩人を結びつけたのは余の想で、これを結びつけて此一編が作品となったのである。」

と記してある。源叔父も紀州も実在の人であったことは

間違ない。源叔父が紀州を自分の家に引き取ろうしたのは、この小説の想である。

私（筆者）は源叔父は知らないが、紀州は子供の頃見たことがあり、その風貌を思い浮べることが出来る。菅一郎画伯が画き残された紀州の像はそのありのまゝである。

さてこの小説は、源叔父と乞食紀州との結びつきがその主題となっている。この二人を結びつけた想は何処から生れたのであろう。

それは独歩が佐々城信子との恋愛の破綻から、自身自身がどれほど誠を尽くし、どれ程熱烈に愛しても、受ける相手にその愛が少しも受け入れられない悲しい人間の持つ宿命観が心の中に醗酵して、この源叔父の乞食紀州に対する深い同情が少しも報いらなかったことと結びつけたのであろう。自分の受けた失恋の深い心の痛みが、この両者の結びつけとして表現したのであろう。

小説「源おち」にあるように、最愛の妻に死別し、ただ一人の愛の結晶であった幼児を海にさらわれ、全く無言の孤愁の世界に居た船頭高原嘉治郎の姿は、熱烈な恋

に破れてその痛手癒え切らず孤独に泣いていた独歩の心を捉えるのに十分であったと思う。

独歩の作品を読むと、自然や風物を筆巧みに描写して、作品が一層引き立っている。

最後に小説「源おち」の中から、佐伯の自然、風物などを写しとった箇所を抜書してみよう。

「中」の初めに

「大空曇りて雪降らんとす。雪は此地に稀なり。其日の寒さ推て知らる。山村水廓の民、河より海より小舟泛べて城下に用を便するが佐伯近在の習慣なれば番匠川の河岸には何時も渡船集ひて来るもの下るもの、浦人は歌ひ山人はのゝしり、最も賑々敷けれど今日は淋しく、河面には連たち灰色の雲の影落ちたり。大通何れもさび、軒端暗く、往来絶え、石多き横町の道は氷れり。城山の麓にて撞く鐘雲に響きて、屋根瓦の蒼白き此町の終より終へと物哀しげなる音の漂ふ様は魚住ぬ湖水の真中に石一個投げ入れたる如し。」

とある。冬の寒い日の船頭町の川岸から町筋の様子を写した文である。昔の様子をなつかしく追憶させる文であ

る。

また、中ほどに

「夜は更けたり、雪は霰と交り霰は雪となり降りつ止みつす。灘山の端を月はなれて雲の海に光を包めば、古城市はさながら乾ける墓原の如し。山々の麓には村あり。村々の奥には墓あり、墓は此時覚め、人は此時眠り、夢の世界にて故人相まみえ泣きつ笑つす。」

と、ある。冬の夜の町の情景である。

「下」のはじめの方に

「雪の夜より七日餘り経ちぬ。夕日影あざやかに照り四国地遠く波の上に浮びて見ゆ。鶴見崎の辺真帆片帆白し。川口の洲には千鳥飛べり。」

とある。葛港の夕刻の景色である。また

「醍醐（代後）の入江の口を出る時彦岳嵐身に滲み、願れば大白の光漣に砕け、此方には大入島の火影早きらめきそめぬ。」

とある。佐伯湾内の夜の風景である。

（おわり）

表紙解説

神内釈迦堂跡石幢について

直川村神内釈迦堂跡にあり県指定文化財である。天文十八年（一五四九）室町後期の造立で、高さ二、二六尺あり積重ね式、基礎の納穴に塔身が安定して建てられている。塔身は普通六角、八角であるが、この塔は四角で、中央龕部、笠も四面である。龕部四面の各面を二区に分け、二仏を浅い浮彫りにして八仏を配している。石幢は六地藏が本体で全く特殊な形式である。思うにこの施主は孝心深く、裏面に亡父母を刻み、地藏菩薩の加護を祈って供養したものであろう。笠は露盤に水煙を陽刻し四注降棟で、軒先に榑木鼻を各個正方形に刻んで見事である。

前面の銘文

謹奉造立六地藏一基

盛嶽左京助貞則

為右現世安穩後世善処也

其時天文十八年己酉九月二日施主敬白

（『直川の文化財』より）